



Title	オンラインコミュニティでつながる世界の子どもと大人
Author(s)	松田, 真希子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20周年記念特別号, p. 124-125
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102027
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

≪ Column 8 ≫

オンラインコミュニティでつながる世界の子どもと大人

キーワード：オンラインコミュニティ、母語／継承語、アイデンティティ、online community、mother tongue/heritage language、identity

活動の背景

日本語を母語とする親や祖父母をもち、日本ではない国で日本語を継承語として学びながら成長する CLD (Culturally and Linguistically Diverse、文化的言語的に多様な) 青少年の中には、日本語能力やアイデンティティに悩みや葛藤を抱くケースがある。彼らの悩みや葛藤は、日本生まれ・日本育ちで、自然な日本語の発音や高度な日本語リテラシーを供えた「理想的」な日本語話者と接する際に意識されやすい。彼らは「どんなにがんばって勉強しても本物の日本語話者にはなれない」「自分の日本語は母語話者より劣っている」といった形で、母語話者－非母語話者の境界で悩む。そのような悩みは子どもからだけでなく、子育てに従事する親からも聞かれる。

新型コロナウイルスの流行によってオンラインコミュニケーションが常態化したことで、国境や距離に縛られないコミュニティの形成が可能になった。筆者は、世界中の CLD 青少年や青少年の支援・教育に関わる人々がつながるオンラインコミュニティが生まれると、空間的な境界による分断を超えて、これまでつながっていなかった人たちが教育によって豊かにつながり、それぞれへのエンパワーメントになるのではないかと考えた。

オンラインコミュニティ CLD-Online

CLD-Online(<https://www.cld-online.com/>) は、国内外で日本語・日本文化を含む複数言語文化環境で生きる青少年とその養育・教育に関わる人を主対象としたオンラインコミュニティである。2020 年 5 月から始まった。初期の 2 年間は大学教員 1 名で運営していたが、現在は継承語を研究対象としている大学教員 2 名と大学院生 3 名が有志で行っている。主に以下の活動を定期的に行っている。

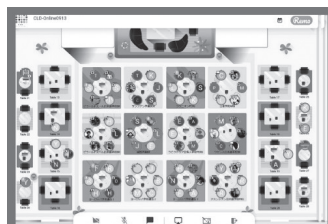
- ①先輩のテーブル：学齢期に多言語・多文化環境を経験して現在は成人している人をゲストスピーカーに招き、当時の経験や思いについての語りを聞く活動。主に日本語で行われるが、通訳を介して他の言語（英語、スペイン語など）で行われることもある。毎回 10 名前後の参加者があり、日本人大学生や地域の外国人支援者も参加した。
- ②対話のテーブル：CLD 児や CLD 児の教育に関わる人が 2 ヶ月間の対話的活動をオンラインで行い、その活動を報告書にまとめる活動。ファシリテーターは『対話をデザインする』（ちくま書房）の著者の細川英雄氏。
- ③CLD フェスティバル：世界中の日本語につながる CLD 青少年が交流するイベント。年に 1-2 回実施し、南米、ヨーロッパ、アジアなどから毎回 50 名～100 名が参加している。学校紹介や、漫才コンテスト、おしゃべり交流会など色々なイベントが行われた。2021 年度からは CLD 青少年が中心となり実行委員会を形成して行

なわれている。

- ④保護者のテーブル：2022 年から保護者の発案で始まった。月に 1 度、主として CLD 児の保護者が語り手となり子育ての体験を語りあうもの。毎回 10 名程度の参加者が世界中から参加している。



先輩のテーブル (Zoom)



CLDフェスティバル (Remo conference)

オンラインコミュニティ活動を通じてどのような変容がみられたか

世界中の日本語につながる人々のエンパワーメントの場とする、という当初の目的はある程度達成されている。継承語として日本語を学習している CLD 児にとっては、フェスティバルで多様な背景をもつ世界中の若者と「理想的」ではない日本語でも交流できる体験をすることで、ありのままの自分でいいし、今の日本語でもつながることを楽しめると、現状を肯定的に捉えることができたようである。また、先輩のテーブルで多様な生き方に触れることで、さまざまな幸せの形がありえることを知り、理想化された日本語継承語話者像と自分との違いを超えることにもつながっているようである。

また、固定的な文化的アイデンティティ観が揺さぶられ、アイデンティティ、そしてことばを動的に捉える変容は、程度差はあれ、全ての参加者に共通していると思われる。モノリンガルの日本語話者の参加者には、当初は自分とは遠い世界の出来事だと人事のように聞いていたが自分も転勤族で似たような気持ちになったことがある、と共通することがあると気づくケースがみられた。また、自分はモノリンガルだと思い込んでいたがよく考えると方言も使うし英語も混ぜて使うといった、自身の言語的・文化的な多様性の意識化が促されるケースもみられた。

オンラインコミュニティというのは、空間的に遠いが境遇が近い人をつなぐ共感の場であるだけでなく、境遇が遠いと思い込んでいたが実はつながっているという意識化を促し、新たな連帯を育む場でもある。こうした空間・世代・言語を超えしい考えの生成や既存の場の変革へとつながる可能性のあるオンラインコミュニティ活動が、今後活性化することを期待する。

(この活動は JSPS 科研費 (基盤研究 B) 20H01271 の助成によるものである)

松田 真希子 (所属：東京都立大学)